

ス若シ之ヲ許ス時ハ即チ必ス原被告ト裁判  
所トノ親交ヲ隔絶シ為メニ訴訟ノ困難ヲ醸  
生スルノ恐アルナリト

第七解原被告ハ上ノ第四解ニ於ケル場合

ニハ自ラ対審ヲ為スルヲ得第七十五條ノ場  
合ニ於テハ自ラ訴訟ヲ行フヲ得ルナリ附添  
人ニ関シテハ本法第八十六條ヲ參看スヘシ  
蓋本條ニ訴訟能力アル者ト明記シタルハ即  
チ訴訟能力ナキ者ノ法律上代人ハ原被告ト  
同一(本法第五十條第二解參看)ニシテ而カモ  
法律上例外ヲナサル場合ニハ必ス原被告  
ナル法律ノ用語ヲ以テ之ヲ包括スルニ因ル

ニ非ラサルナリ尚ホ訴訟能力ニ付テハ本法  
第五十條乃至第五十五條ヲ參考スヘシ

第八解訴訟能力アル者ヲ以テ云々(本條理  
由説明ノ原文ヲ抄出スヘシ即チ曰

本法草案ハ各聯邦法ニ於テ訴訟代人選定  
ニ関シ制限スル所ノ矯正セリ(字漏生國裁  
判通則第一篇第三章第二十五條ウレテム  
ベルグ國第百十二條字漏生國訴訟法草案  
第九十一條サツクセン國全上第三百三十四  
條第三百三十九條)必竟各邦ノ規則タルマ  
一時偶成ノ法制ニシテ確然タル主義ノ存  
スルニハ之レアラス而テ字漏生國訴訟法

草案ニ載スル治安裁判所及ヒ商事裁判所  
 ノ為ノ更ニ第二等ノ代言人ナルモノヲ構  
 成スルノ原案ハ本来ノ法義ノ目的ニ背反  
 シ且司法権ニ利スル所鮮ナカルヘキヲ以  
 テ本法ハ之ニ後ハスシテ止ミタリ抑本法  
 ニ於ケル精神ハ方ニ本法第八十七條第二  
 項及ヒ第四百十三條ニ明示スル如ク代言  
 人ニ限り他人ノ訴訟代人ヲシテ裁判所ニ  
 於テ代表スルノ營業ヲ為シ得ルノ趣義ニ  
 基ツキ且本法第四百十三條ニ在ル如ク努  
 トメテ偽稱代言人ノ惡ムヘキ行為ヲ防遏  
 スルニ在ルナリ又北部独乙聯邦草案ノ第

百二十七條及ヒ其他ノ法制ハノイフル國  
 第四百四條ニ於テ特ニ代言人ニ限り訴求シ  
 得ル代人給料ヲ請求シ得ルモノト明示ス  
 ル規則ハ之ヲ訴訟法ノ範圍中ニ挙クヘキ  
 モノニ非ラサルヘシ（サツクセン國民法第八  
 百二十條法朗西民法第九百九十九條參  
 看又本法草案ニテ本人訴訟ニ於テ訴訟代  
 人ヲ用フルヲモ允ルスノ法律ヲ掲ケタル  
 ハ固ト独乙普通訴訟規則ノ原則ニ拠レル  
 所ニシテ現ニ行ハルハ即チハノイフル  
 國訴訟法第六十八條第四百條バテン國第  
 百二十八條第四百三十條バイルン國第七十

ハ条第二項奧斯太利草案第百二条北部独  
乙聯邦草案第百二十六条ニ掲クル所トス  
而テ本法第五十一條ニ因テ婦女子ハ訴訟  
代人タルヲ得ヘキコトハ固トヨリ明瞭ナ  
リ云々

委任ヲ受ケタル者ハ訴訟能力ヲ有スルト否  
トニ関シテハ本法第五十条乃至第五十三条  
又ハ民法ニ准拠スヘキナリ既ニ本法第五十  
四条ノ例外法律ヲ以テ訴訟能力ナキ者ト虽  
モ自己ノ事件ニ関シテハ自ラ之ヲ為スル  
ルシタレモ是レ復タ他人ノ訴訟ヲ代理シ得  
ルノ趣義ヲ生セシメタルニ非ラス

本法第五十条第二解ニ拠レハ即チ法律上人  
体及ヒ人民集合ハ訴訟能力ヲ有セシメサル  
トハ虽モ然カモ是ニ委任シタル訴訟代理ノ  
全権ハ無効ナリト為ラス若シ之ヲシモ無効  
ナリトスル時ハ商業上ノ交通ニ大ナル障碍  
ヲ發生スヘカラシム蓋此ノ如キ者ニ共ヘタ  
ル委任ニ付テハ民法上ノ趣義ニ後ヒ之ヲ保  
有セシムヘシ而テ本法第七十五条ニ挙タル  
結果ハ必竟本法第七十七条ヲ以テ允ル所  
ノ代理ハ訴訟能力アル者ヲ以テ裁判所ニ代  
表セシムヘシトスルニ過キサル而已

第七十六條 (訴訟代人ハ唇面ヲ以テ証明ス

ヘキノ條)

訴訟代人ハ其委任ヲ委任狀ニ因テ証明シ且其  
委任狀ヲ裁判所記録ニ添綴セシム可シ  
私文証書ハ相手人ノ請求ニ因リ裁判所又ハ公  
証人ノ公証ヲ受クルヲ要ス可シ但公証ヲ受ク  
ルニ付テハ証人ヲ呼出し若クハ調書登記ヲ為  
スヲ要セス

(第一解理由説明) 本條乃至第八十三條ハ訴

訟代人ニ関スル細則ヲ示シタルモノニシテ  
而テ例ヘハ本法第七十九條第二項及ヒ第八  
十三條第一項ニ於ケル例外ノ場合ヲ除キ總

ヘテ代言人訴訟ニ訴訟代人トシテ出廷スル

代言人俟ニ其他ノ訴訟ニ代人タル者ニ付テ

規定スル所トス抑本法第八十四條ニ於テハ

訴訟代人タル資格ノ適否ニ付テ調査スヘキ

推利義務ニ関スル規則ヲ定メ本條ニ於テハ

還テ委任契約ノ程式ニ付テ貴重スヘキ規定

ヲ示シタルナリ蓋裁判所又ハ相手人ニ於テ

其委任ノ証明ヲ求メ得テ之ヲ請求スル以上

ハ代理者ハ唇面ヲ示シテ委任ノ確証ヲ挙示

セサルヘカラサルヘシ此原則ハ即チ字漏生

國草案第九十二條ノ明文ノ趣旨ニ同シキ所  
ニシテ而テ之ヨリ生スヘキ結果ハ同草案第

九十七條及ニサクセン國草案第三百四十四  
條ニ明示スル各聯邦其程式ヲ異ニスルモ必  
ス成規ノ委任狀ヲ止ヲ得ス用ヘサルヘカラ  
スト為スニ在ルナリ下ノ第四解參看今原被  
告カ此ヘタル昏面上ノ委任(北部独乙聯邦草  
案第百二十九條)ト云ハスシテ一般ニ昏面ノ  
委任(委任狀)ナル語ヲ選用シタルハ即チ此一  
項ヲ以テ各種異様ノ体裁ヲ為ス昏面上委任  
ノ付與方法ヲ際括セシメント欲スルカ為メ  
ナリ是ニ於テ本條ニテハ訴訟委任ハ委任者  
ノ全般ノ訴訟一切ニ對シ又ハ一定ノ訴訟種  
類ニ對シ又ハ各訴件ニ限リ發スルモノ、規

則(北部独乙聯邦草案第百三十條)ヲ特示スル  
ヲ要セサルナリ(字漏生國裁判通則第一篇第  
三章第三十二條)ウユルテムヘルグ國訴訟法第  
百十七條バイルン國同上第百十七條ハノ  
フル國全草案第九十六條參照)且本條ニ於テ  
ハ原被告自ラ裁判所ニ於テ委任シタルコトヲ  
口述シ之ヲ調音ニ登記セシメ得ルノ成規ヲ  
允ルス趣義ナルヲ見ルヘシ(ハノール國許  
訟法第七十一條)バデン國同上第百四十一條  
ウユルテムベルグ國全上第百十九條バイルン  
國同上第百十八條ハノール國全草案第百九  
十八條(字漏生國草案第百十八條)北部独乙聯

邦草案第百三十二条参考)而テ又委任ノ了ラ  
審問調音ニ登記スルノ程式(本法第百四十六  
条)ハ以テ音面上委任ノ式ヲ補充シ得ヘシ  
本条第一項ハ幾ント各草案同文ニシテ而テ  
其趣旨ニシテ彼ノ貧困者訴訟費用ニ関スル  
権利ノ享受ヲ得タル者ニ屬セシメラレタル  
代言人(本法第百七条)ト虽モ其本人ヨリ音  
面上ノ委任ヲ得テ裁判所供ニ对手人ニ証明  
スルノ義務アリト一定シタル所ハハノーフ  
ル國訴訟法第六十九條オウルデンボウルグ國全  
上第六十五條第一項字漏生國草案第百二十  
三条(三)北部独乙聯邦草案第百二十九條等ニ

齊シキナリ又字漏生裁判通則ノ趣義ヲ説明  
スル千八百三十五年五月二十九日ノ勅宣其  
他サツクセン國草案第百八十八條バイルン  
國訴訟法第三十九條ウルテハベルク國全上  
第百六十八條第二項ニ依レハ裁判所ノ指令  
ハ委任状ヲ代表ストアレ氏今本法草案ニ批  
テ貧困者ニ屬セシメタル代言人ニ音面上ノ  
委任ヲ要スト確定セサルヘカラスハ即チ  
其代言人ハ本人ノ意思ニ後ニ訴訟ヲ棄却シ  
得ルノ権利ヲセサルヘカラス(本法第七十七  
条)且音面上ノ委任ナキ時ハ第七十九條ノ規  
則ニ後ニ代言人ノ代理權利ヲ制限シ得サル

ヘシト為スニ由ル所ナリ  
而テ委任状ノ原被告両造間ニ於テ切要ナル  
關係ヲ有スルニ因由シテ近時ノ新法制ハ一  
般ニ訴訟代理委任状ハ必ス公証ヲ受クヘシ  
ト規則スルナリ即チハノール國訴訟法第  
七十條フラウンシュヴァイヒ國全上第廿七條バイ  
ルン國全上第ハ十五條是レナリ又少ク之ニ  
異ナルハ「ウエルテムベルグ國訴訟法第百十八  
條ハノールフル國草案第九十七條サツクセン國  
草案第三百四十四條ニシテ即チ其私文証書  
ニシテ真偽ノ疑問起リタル時ニ方テ公然ノ  
証明ヲ要スト定メ北部獨乙聯邦草案第百三

十三條ノ趣義モ亦之ニ有シ而テ該草案及ヒ  
本條第二項ニ單ニ私書ノ委任状ハ對手人之  
ヲ請求スルキハ公証人又ハ裁判所ニ依テ公  
証ヲ受ケサルヘカラスト概言シテ即チ其對  
手人ノ請求ハ何ンタル事由ニ出ルモ取テ其  
原由ヲ明示スルヲ要セサル趣義ナルヲ明カ  
ニシタリ又為替條例第八十七條ニ同シク交  
通上ノ便宜ヲ計リテ其証明ニ方テハ証人ヲ  
呼出サス且調査登記ヲモ要セスト定メタリ  
此趣義タルヤ「ハノール國訴訟法第七十條  
字漏生國草案第九十七條北部獨乙聯邦草案  
第百三十三條ト同義ナリ且此ノ如キ簡便ヲ

主トシ且訴訟代人ノ委任ニハ別段ナル公然  
ノ程式ヲ要セサルヲ原則ト為スニ因由シテ  
本法ハ他邦ノ法制ノ如ク綿密ニシテ更ニ簡  
易ナル規則ヲ定ルニ至ラス乃チ其細密ナル  
法制ノ趣旨ハ公然タル職負ノ資格ヲ以テ許  
訟ヲ為ス原被告ノ委任状ハ敢テ特ニ之ヲ所  
持スルヲ要セス或ハ他ノ職負例ヘハ政府町  
村寺院等特ニ公然ノ印章ヲ定用スルモノヨ  
リ之ヲ付與セシムルノ規則ナリ例ヘハ「ハ」ノ  
「フル」國訴訟法第七十條全國草案第九十七  
條字漏生國草案第九十七條北部獨乙聯邦草  
案第百三十一條ヲ参考ス可シ又委任状ニ関

スル費用ハ本法第八十七條ノ交付義務ノ場  
合ヲ除クノ外ハ猶ホ已ニ字漏生國裁判通則  
第一篇第三章第七十條俟ニ同國訴訟法草案  
ノ理由説明ニ著シク説述シアル如ク委任者  
ニ於テ負擔スルヲ當然トスヘシ  
又本條ニ相干格スル如キ為替條例第十七條  
及ヒ高法第四十二條第四十七條第五十九條  
ニ付テ疑問アルヘシト虽モ還タ本法實施條  
例第十三條第一項ノ趣旨ニ基ケハ即チ相抵  
觸セシテ行ハルヘキヲ知り得ルナリ下ノ  
第六解参照  
本法草案ニ於テハ代理委任状ニ揭示スヘキ



条件ノ必要トスルモノ之ヲ他邦ノ法例ニ比  
スレハ「バイルン國訴訟法ト共ニ其區域ヲ廣  
フスルナリ」(字漏生國裁判通則第一篇第三章  
第三十條ハノイフル國訴訟法第六十九條ウ  
ルテムベルク國全上第百十七條バテン國全  
上第百四十二條ハノイフル國草案第九十六  
條字漏生國草案第九十六條北部独乙聯邦草  
案第百三十一條参照)

(第二解制定ノ沿革) 本條ト相別異スルハ上  
ノ第一解ニ於テ明カナル如ク北部独乙聯邦  
草案ニシテ而テ本條ニ比スレハ甚ク偶成法  
義ヲ免カレサルナリ其他ノ各草案ハ拳テ同

趣義ナリ然リ而テ國議院委員ハ本條第一項  
ニ「且其委任状ヲ裁判所記録ニ添綴セシム可  
シ」ノ數語ヲ追補シタルナリ

此第一讀會ニ於テハ種々ノ動議アリシモ悉  
ク棄却セラレタリ就中「バイルン國及ヒ法朗  
西國ノ法律ニ倣ヒ代言人ハ本條ノ規則ニ支  
配セラレサル」ニ改正セントノ動議及ヒ「ハ  
ノイフル國ノ法制ニ擬シ概シテ委任ヲ更ニ  
簡易ナラシメント」ノ動議アリ又訴訟代理ノ  
委任ハ審問調昏ニ必ス登記スル」ニ改メン  
トノ動議モアリシ蓋内閣代理員ハ右ノ第一  
動議ヲ駁シタル趣義ハ即チ本法ニ於テハ已

ニ法朗西法制ニ及シテ第七十七條ヲ以テ特  
別委任制ヲ廢止シ且法朗西法律

商法

商法

獨逸訴訟法釋義

第七稿

法律ニ基ク「代訟人解任ノ訴訟」ノ如キ其危険  
 ラ免カレサルモノニテ已ニ白耳義國草案ニ  
 於テ之ヲ削除シタル等ヲ述ヘ且本法第八十  
 二條(現今八十四條)ニ対スル理由説明ニ縷述  
 スル所ヲ敷衍スルニ在リシ而テ其第二第三  
 ノ動議ニ対シテハ本條ノ理由説明ニ挙述セ  
 ル理由ヲ以テ之ヲ駁シタリ  
 又第二議會ニ於テ再ヒ委任ノ簡易方法ニ付  
 キ建議アリシモ復タ採用セラレスレテ消滅  
 シタリ之ニ反シ委任状ヲ調看ニ添付セシム  
 ルノ一事ヲ本條第一項ニ追補スルノ議ハ遂  
 ニ採用セラレタリ此建議ニ対シ内閣代理負

ハ若シ数多ノ事件ニ付キ唯一ノ委任状ヲ以テ各所ノ裁判所ニ訴訟ヲ為サ、ルヘカラスアル時ニハ為ノニ頗ル困難ヲ感スヘシト駁シタリシモ之ニ答テ然ル場合ニハ其委任状ノ本旨ハ只ニ之ヲ驗閲ニ供スルノシニテ正ニ証明シタル謄本ヲ呈出スレハ即チ可ナリト説明セリ（バイルン國訴訟法第八十七條北部独乙聯邦草案第百四十條第三項ハ即チ然ルナリ）此追補ニ付テハ必竟昏面審理ノ嫌アリテ此訴訟法ト抵觸ス可シト云フテ頻ニ論弁アリタレ氏遂ニ追補スルニ決シタリシ、ミナラス此訴訟法ニ於テハ已ニ裁判所記録ノ

糸項ニ付テ議定シアリ且本法第五百十三條（五）及（四）第五百四十二條（四）ノ規則アルニ因テモ此追補ハ缺クヘカラスト主張シタリ（第七十四條即チ現第七十六條ニ對スル公正説明（本法第五條第二解參照）町村ノ職負又ハ公然ニ於テ認定シタル委任状及ヒ寺院職負ノ付與セル委任状ハ假令公証人又ハ裁判所ノ証明ヲ有セサル氏之ヲ公正証ト看做ス可シトナリ）蓋千八百七十六年五月四日ノ第百二十六回ノ會議ニ於テ本條ノ第三項トシテ凡ソ公然ノ職官ニシテ其職務上ニ於テ為ス訴訟ニ付

テ出シタル委任状ハ之ヲ公正証トシテ別ニ  
証明ヲ要セサルノ明文ヲ揭示セントノ動議  
アリシモ内閣代理負ハ本法第三百八十條及  
ヒ第三百八十二條ヲ引挙シテ以テ此明文ヲ  
特示スルヲ無用ナリト説明シテ遂ニ議決ス  
ルニ至リタリ妥當ト為スヘシ

〔第三解代人〕

本条ノ理由説明ノ起頭係ニ動  
議ノ駁説ニ於テ已ニ明瞭スル如ク上ノ第一  
解及ヒ第二解參看代人トハ即チ各代理人ヲ  
際括スルノ義ニテ代言人其他經濟上ノ支配  
人又ハ公共資産ノ管理人(下ノ第六解參看ヲ  
モ包含ス且本法ニ於テハ独乙普通法及ヒバ

チン國訴訟法第百三十七條乃至第百四十條  
ニ於ケル如キ推認ノ委任ナルモノヲ採用セ  
サルナリ本法第八十五條第一解第三項參看  
然レ氏又是ヲ以テ法律上ノ委任ト錯雜スル  
勿レ例ヘハ法朗西民法第千四百二十八條及  
ヒ「サツクセン」國民法第千六百九十七條ノ場合  
ニ於ケル如ク配偶夫ハ其婦ノ委任状ヲ有ス  
ルヲ要トセサルナリ又本法第五十五條ニ於  
ケル訴訟管理人ハ固トヨリ法律上代人ノ權  
利ヲ有シテ全ク本人ト同一ノ權利アル者ナ  
ルカ故ニ本条ノ代人中ニ包含シアルナルナ  
リ(本法第五十五條第一解第二項及ヒ第七十

四條第七解參看

之ニ及シ上ノ第一解第二項ニ奉述スル所ノ  
負者ノ為メニ指命スル代官人ハ必ス其本人  
ノ委任状ヲ有シテ自ラ証明セサル可ラサル  
ハ確然タリ

此規則タルヤ本法過嚴ニ失スルカ如クナレ  
モ還タ本法第八十五條ヲ以テ稍之ヲ寛和ナ  
ラシメ即チ裁判官ハ一時假リニ好意ノ管理  
ヲ允許シ得ルナリ

〔第四解委任状〕 本條第一解及ヒ第二解ニ依  
レハ審問調音ニ登記スル口頭ノ委任ハ委任  
状ト同一ノ効力ヲ有シ又本法第四百五十七

條第四百七十條ニ依テ治安裁判所ニ属スル  
事件ニ付テハ裁判所書記ノ調音ニ記載スル  
時ハ則チ委任状ニ同一ナルナリ

〔アニアルファベード、信号〕 北部独乙ニ於テハ  
自ラ讀ミ且昏シ能ハス又ハ偶然自昏シ能ハ  
サル時ノ信号ヲ云フナリ〔字漏生内國通法第

一篇第五章第百七十二條參看〕而テ本條第一  
解第一項ノ理由説明ノ趣義ニ及対シテ某議  
員ハ本條第二項ヲ演繹シテ其手記ノ記号ト

シテ手掌ヲ押捺シテ足レルモト断定シタ  
リシニ内閣代理員モ亦之ヲ賛成シタリト虽  
モ必竟此意見タルヤ本法第三百八十一條及

第四百五條第二項ニ照シ私文証書ニハ必  
ス簡便ナルヘケレ氏公正証書ニ関シテハ各  
聯邦法ノ規定スル所ニ拠ラサル可ラサルナ  
リ

委任状ノ条件  
本法ニ於テハ委任状ニ具備  
スヘキ条件ニ付テ故ラニ規則ヲ明示セシ  
テ上ノ第一解參看而カモ只本人ハ明記スル  
訴訟ヲ自己ニ代リ為ス丁ラ委任セル旨ヲ示  
セハ即テ可ナリト為スナリ但代言人訴訟ニ  
於テ本法第七十九條ニ依リ其委任ノ範圍ヲ  
制限シ又ハ本人訴訟ニ於テ本法第七十四條  
第七十五條ニ對スル第六解參看二三ノ所為

ニ限リ委任セントスル時ニハ必ス之ヲ委任

状中ニ明細ニ表記セサルヘカラサルナリ

第五解證明  
本法第八十四條第一百二十一條

第一百二十二條第一百三十條ニ依テ後來各邦ニ

於テ之ヲ要シタルカ如ク受任者ハ当初出廷

ノ時ニ方テ必ス委任状ヲ示シテ証明スルヲ

要トセスシテ及テ代言人訴訟ニ於テハ對手

人本人訴訟ニ於テハ裁判所之ヲ要求スルヲ

俟テ提示證明シ得ルナリ蓋其理由ノ在ルア

ツテ然ルニハ非ラス何時モ之ヲ為シ得ルヲ

以テ而已  
本法第八十四條併ニ其第一解參看

然シ其委任權限範圍ノ超越ヲ防ク為メニハ



受任者其最初、準備昏面ト共ニ委任状、謄本ヲ对手人ニ送達シ且其原昏ハ準備昏面、謄本ト付シ本法第百二十四条參看其送達ト同時ニ又ハ第一回ノ出廷ノ時ニ裁判所ノ記録ニ添付スル為メ納ムルヲ便利トスヘシ独リ便利、ミナラス又对手人ニ指テハ大ナル利益ヲ得テ而テ裁判所ハ更ニ委任状、有無ヲ審査シ以テ本法第五百十三条(五)及ヒ第五百四十二条(四)ニ依リ濫ニ上訴スルノ弊ヲ防遏セシムルノ責任アルナリ然リ而テ代人訴訟ニ指テハ職權ヲ以テ委任ノ適否ヲ審査スルコトヲ為サ、ルナリ(本法第百八十四条第

一 解參看

第五解(甲) 裁判所記録

本条第二解ニ詳カナ

第六解 私証昏及ヒ其証明

委任状ハ公文ノ

程式ニ依テ作ルヲ得ス(上)ノ第一解第三項參看然レ氏私証昏ニハ必ス对手人(決シテ裁判所)ノ要求アルヘカラス(ノ)要求ニ因リ且其理由ヲ示メサルモ速ニ公証人又ハ裁判所ノ公証ヲ受テ之ヲ示サ、ルヘカラス但他ノ証明ノ美ニ従フモ固トヨリ妨ケサルナリ蓋本条第一解第三項及ヒ第二解ニ挙述スル如ク実ハ委任程式ノ簡易ハ排斥セラレタルノ動議

ナリトハ虽モ本条ノ規則ハ固トヨリ独乙ニ  
非ラサル外國ニ於テ無効ナルヲ以テ独乙帝  
國領事ノ付與セル証明ハ自ラ有効ナルナリ  
千八百六十七年十一月八日頒布ノ領事條例  
第十四条第十五条參看又「アンアルフアベード」  
ニ付テハ上ノ第四解ヲ參看スヘシ  
何ニタルモ「ヲ公証」ト看做ス可キ字ニ至  
テハ宜ク本法第三百八十条第三百八十二条  
ヲ參酌スヘシ且其之ヲ町村等ニ適用スルニ  
付テハ上ノ第二解ヲ看ルヘシ  
又經有上ノ支配人又ハ公共資産ノ管理者ハ  
一訴訟アル毎ニ該當職負ノ委任状ヲ携帶セ

サルヘカラス是レ此代官人ハ自ラ該當職官  
タルノ資格ヲ有セサルニ由ル(バイルン國訴  
訟法第八十九条第二項ノ規則ハ異ナリ)  
本条未項ノ明文ノ為メ各聯邦法ノ侵凌セラ  
レサルハ言ヲ俟タスシテ會議筆記録ニ於テ  
モ其然ラサル旨ヲ明掲シアルナリ然リ而テ  
本条ニ又ハ裁判所公証人トアルヲ以テ未タ  
裁判所ニ於テ公証權ヲ有セサル聯邦ニ於テ  
モ尚ホ公証スヘキ義ナリト誤解スヘカラス  
本法ハ固トヨリ自由ノ裁判制ニ對シテ規定  
シタルニ非ラサルナリ裁判所編制法実施条  
例第二条及ヒ本法第一条第四解參看蓋此語

ハ商法第百七十四條第百八條ヨリ抄取セ  
ル所ニシテ只各聯邦法ニテ裁判所ノ公証ヲ  
要シ又ハ公証人ノ公証ヲ要シ又ハ両ツナカ  
ラ之ヲ要スルモ各其慣行ニ依ヘハ即チ足レ  
リトノ義ヲ示シタルノニ  
上ノ第一解第四項ニ於テ商法及ヒ為替法ノ  
規則ニ関セサル丁ヲ述フルト虽モ復タ公証  
スヘキ義務ナシト云フニ非ラス其對手人ハ  
ハ之ヲ要求スルノ権利アル丁ニ定メアルナ  
リ

第七十七條 (特別) 部理委任ヲ要セサルノ條

訴訟代理ノ委任ハ總ヘテ其訴訟ニ関スル所為  
ニ付テ効カアルモノニシテ反訴再審強迫執行  
ノ手續ニ因テ生シタル所為ニモ亦其効アルモ  
トス其他代人ヲ選定シ若クハ上級裁判所ニ  
對スル代人ヲ委任シ又ハ和解シテ訴訟ヲ止メ  
訴訟物件ヲ拋棄シ若クハ對手人ノ請求ヲ承認  
シ又ハ對手人ヨリ弁償スル費用ヲ受領シ得ル  
ノ効カアリ

第七十八條 (全上)

本案訴訟ニ付テ為シタル委任ハ主參加差押又  
ハ假差押ノ手續ニ付テノ委任ヲ含蓄スルモノ

トス

（第七十七條ニ對スル理由ノ説明）抑独乙各邦ノ法制ニ於テハ訴訟上適當ノ委任ヲ以テ託セラルル、訴訟代人ノ権限ノ廣狹ニ付テ定ムル所ハ頗ル異同アルナリ今爰ニ字漏生國裁判通則第一篇第三章第三十一條ブラウンシュヴァイヒ國訴訟法第七條オウルデンボウルグ國全上第五十條ハノール國全上第七十二條バデン國全上第四百十四條ウエルテムベルグ國全上第二百零二條第百二十一條バイルン國全上第九十條以下字漏生國訴訟法草案第九十九條乃至第百二條サツクセン國全草案第三

百四十九條以下北部独乙聯邦草案第百三十四條第百三十五條ヲ挙テ参照スルニ各異同スル所尠カラスト虽モ特リ訴訟代人タル者ハ訴訟ノ進行中常ニ發生スルヲ例トナスヘキ事項ノ執行ニ付テハ其受任中ノ事項ト看做スヘク其他ノ所為殊ニハ訴訟ノ拋棄ニ関スル所為ニ付テハ更ニ特別ノ委任ヲ受ケサル可ラスト為ス所ニ至テハ皆同一ニシテ而カモ此特別委任ヲ要セシムル事項ノ範圍ヲ努トメテ狹隘ナラシムルノ主義モ亦一樣ナリ蓋各法制此ノ如キ律義ニ基ツキタルハ必竟訴訟代人ノ委任権限ヲ狹隘ニ制スルハ訴

訟ノ確實ニシテ迅速ナル結局ヲ期スルノ目的ト撞着シ且委任程式上事毎ニ特別委任ヲ要スモノトセハ其効力ハ幾ント皆無ニ似タルニ至ルヘシト云フヲ是認シタルニ職由ス前述ノ理由ニ因リ本法ハ即チハノール國訴訟法第七十二条及ヒ全上草按第九十九条ニ奇シク後來ノ法制ヲ更ニ擴張シテ其範圍ヲ大ニシタリ盖妥当ト云フヘシ乃チ本条ニ於テ現実既ニ幾ント其迹ヲ絶ツニ至リタル特別委任ノ要求ヲ全廢シテ訴訟代人ハ総ヘテ訴訟上ニ関スル所為ヲ行フノ委任及訴訟再審強迫執行ニ因テ起ル事項其他後任ノ代人

又ハ上級裁判所ニ向テノ代人ヲ任命シ及ヒ對手人ヨリ弁償スル費用ノ領収ヲ包括スルニ和解ニ依テ訴訟ヲ停止シ又ハ訴訟物件ヲ拋棄シ又ハ對手人ノ請求ヲ承認スルノ權限ヲモ有スルモノト通則ヲ規定シタリ且強迫執行ニ係ル訴訟上ノ所為ニシテ一ノ訴訟ノ体裁ヲ為スモノ多シ即チ本法第六百四十七條第六百六十七條第六百八十五條乃至第六百八十九條第六百九十一條以下第六百九十六條參看然レモ是レ實ハ本案ニ付テノ所為ノ一部タルニ過キサルノニ然リ而テ訴訟代人ノ委任權限ノ洪大ニ失スルノ嫌アリトスル

モ之ニ対シテ本法第七十九条ヲ置テ以テ本  
 人ノ代理権ヲシテ和解上ノ訴訟停止、訴訟物  
 件ノ拋棄要求ノ承認ヲ除キテ委任セシメ得  
 ルノ規則ニ依テ妥當ヲ得セシメアルナリ  
 又本法ニ於テ訴訟代人ニ對手人ヨリ訴訟費  
 用ニ非ラサル他ノ弁償ヲ受領スルノ権利ヲ  
 付與シアラスト虽モ固トヨリ本条ノ趣義ニ  
 抵触シアラサルナリ何ントナレハ即テ争論  
 ニ係ル義務ノ執行ハ訴訟外ノ所為ナレハナ  
 リ

〔第二解制定ノ沿革〕 已ニ第一解ニ挙述スル  
 如ク北部独乙聯邦草案ハ尚ホ特別委任ヲ要

スルノ趣義ニ拠レリ各草案ハ皆同義トナリ  
 而テ本法第七十八条ニ付テハ國議院委員会  
 ニ於テ異議ナリ採用セラレタリシモ第七十  
 七条ニ付テハ其第一読会第二読会ニ於テ  
 又ハ和解シテ訴訟ヲ止メ訴訟物件ヲ拋棄  
 シ若クハ對手人ノ請求ヲ承認シ  
 ノ数文字ヲ削除セシ何ントナレハ是レ頗ル  
 危険ニシテ及令第七十九条ノ制限規則アリ  
 氏本人ニシテ代人ヲ信用スルノ深カラサル  
 如キ意ヲ表スルヲ厭フテ取テ此条ニ依リ難  
 キ情状モ之レナキニ非ラストノ動議アリタ  
 リ遂ニ採用セラレステ止ミタリ又第七十

八条ノ北部独乙聯邦草按ト異ナル所ニ付テ  
ハ下ノ第五解ヲ参看スヘシ

〔第三解〕總ヘテ其訴訟ニ関スル所為ニ付キ  
抑第七十七条ハ訴訟上代理ノ委任ヲ主トシ  
タルモノニシテ即チ代言人訴訟ニハ必ス之  
ヲ出ササルヘカラサル所ノ又本人訴訟ニ付  
テハ之ヲ為シ得ヘキ所ノ訴訟上全体ノ委任  
ニ付テ規定スルモノナルカ故ニ本法第七十  
九条第五解参看〔本法第七十九条第二項ノ場  
合〕ハ之ヲ包含セサルナリ又本条ノ明文ハ訴  
訟上ノ所為ニシテ特別委任ヲ要スルナク  
施行シ得ヘキ事項ノ主タルモノヲ列挙シテ

即チ限定ノ式ニ非ラス类推ノ式ニ拠レルナ

レハ本条ハ復タ事實ノ供述〔第八十一条参看  
訴旨ノ擴張〕〔本法第二百五十三条〕訴旨ノ變更

〔本条第五解〕証眉ノ承認立証ノ拋棄宣誓ノ要

求及ヒ及求宣誓ノ取消〔本法第三百五十六  
条〕第四百十條以下第四百二十九条ニ付テモ受

任中ノ事項ト為スヘシ獨リ宣誓ヲ為スルハ  
本法第四百四十条ニ依リ必ス其宣誓義務ア

ル本人ヲシテ行ハシメサルヘカラス  
只委任中ノ事項ト看做スヘカラサルハ純然

タル訴訟上ノ所為ニ屬セサルモノ例ヘハ第  
一解ニ挙クル争訟ノ物件タル金貨ノ受領其

他訴訟物件若クハ本人ヨリ預リアル証言ヲ  
対手人ニ引渡ス等ノ所為即チ是レナリ  
又訴訟上ノ代人ハ訴訟物件ニ付テハ和熟シ  
テ其効アレバ原告間ニ控テ未タ一定セサ  
ル紛争ノ差異ニ付テハ和解ノ効ナキモノト  
ス且裁判管轄ノ認諾ニ付テハ亦和熟シ得ル  
モ仲裁裁判ノ契約ハ之ヲ結締スルノ權ナシ  
蓋本法第八百五十一条ノ理由説明ニ明言ス  
ル如ク若シ仲裁ノ判ノ契約ヲ為スモ為メニ  
訴訟ヲ停止セサル乎若クハ訴訟上ノ所為ニ  
係ラサル事項ニ関シテハ之ヲ結締スルノ權  
アルナリ然リ而テ分散法第六十五條ニ依リ

分散ノ場合ノ和解ニ付テハ本條ノ規則ニ準  
スヘキナリ  
蓋和解訴訟ノ拋棄及ヒ要求ノ承認ニ付テ爰  
ニ注意スヘキモノアリ即チ本法第五十二條  
ニ依リ訴訟能力ナキ者ノ法律上代人ハ其自  
ラ代テ訴訟ヲモ為シ得ル限リ一切ノ制限ヲ  
被ラサル所是レナリ例ヘハ後見人ニシテ訴  
訟上ノ委任ヲ為ス時其受任者ハ本法ニ列載  
スル權限ノ委任ヲ受クルナレバ後見人ハ自  
ラ其責任ヲ負フ者ナルカ故ニ本法第五十二  
條第三解參看更ニ又本法第七十九條ニ於ケ  
ル制限ノ規則ヲ利用スルヲ可トスヘカラシ



(第四解代人ヲ選定シ) 是レ次テ挙クル上級  
裁判所ニ対スル代人ヲ委任シトアルニ対立  
セシメテ單ニ各訴訟上ノ所為ノ為メニ代人  
ヲ選定スルニ過キサルモノ、如ク誤解スヘ  
カラス而テ上ノ第一解ノ理由説明中ニハ「  
ガスチトテオン」代人ナル語ヲ用ヘアリテ元  
此語タルヤ一訴訟ニ付キ各裁判所ニ対スル  
代人ヲ任定スル権アル者ノ義ナリ抑本条ニ  
依レハ純然タル管理人ニ如キ代理人ニ單簡  
ナル訴訟上ノ所為ニ付キ制限ヲ為ストセハ  
豈奇異ナラスマ然リ而テ此管理権アル代人  
其受任ノ権利ヲ制限スル丁ナク之ヲ他人ニ

代理セシムル時其代人ハ即チ訴訟上代人ニ  
シテ即チ本法第百六十二條以下ノ送達ヲ受  
クヘキナリ  
代人タル者ハ本法第七十四條ニ依リ代理人  
訴訟ニ付テハ代言人ナラサルヘカラサルハ  
固トヨリ論ナク又代理受任者ハ受任上故意  
ノ所犯ニ付テハ其責任ヲ負フノ義務アリ  
(第五解第七十八條ノ制定ノ沿革及ヒ其解釈  
蓋第七十八條ハ字漏生國訴訟法草案第百二  
条ニ於テ明示スル所ノ頗ル適切ナル趣義ニ  
基ツキ即チ第七十七條ニ挙クル代理権限ノ  
外尚ホ其對手人ニ対シ強迫執行ノ場合ニ於

ケル紛争ニ付テモ代理ニ得但委任ヲ受ケタ  
ル訴訟ヨリ新タニ一ノ訴訟ヲ生スルキハ其  
訴訟ヲ為スノ権限ヲ有セサルノ趣義ニ由レ  
リト虽モ本法ハ更ニ之ヲ修正シテ本案ニ対  
シテ其ヘタル委任ハ主参加訴訟(本法第六十  
一条第六百九十条)差押及及差押(本法第七百  
九十六条以下)ニ関スル手續ニ付テノ委任ヲ  
モ含蓄スルモノトハ定メタルナリ(北部独乙  
聯邦草案第九十九条第七百二十八条第七百  
三十八条参看)右ノ訴訟事項ト本按訴訟トハ  
固トヨリ頗ル密着シアルモノニテ委任者ノ  
当初代理ヲ委託スル時ニ此範圍ニマテ及ホ

スノ意思ナルヘシト云フヲ以テ理由ト為ス  
然レモ又北部独乙聯邦草案第七百二十八条  
第七百三十八条ニ及対シ引続キテ成立ツ本  
案訴訟ニハ其初ニ起ル差押及及差押ノ処  
分ニ対スル委任ヲ以テ及ホスヘカラスト為  
セリ必竟本案ニ先ツ差押及及差押ハ止ム  
ヲ得サル強迫様ノ及行ノ処分タルニ過キサ  
ルナリ(本法第七百四十四条第八百六条第八  
百十六条参看)是故ニ此如キ臨時急速ニ結了  
スヘキ訴訟上ノ為ニ対スル委任ヲ付共スル  
ニハ敢テ本案訴訟ヲ代理セシムル者ヲ選定  
スルカ如キ鄭重ヲ選任ヲ要セシテ可ナル

ヘキナリ

制定ノ沿革ニ付テハ上ノ第三解ヲ参看ス可

シ

本法第五百六十三条ニ依レハ証言ニ関スル  
訴訟ニ継キテ為ス審理ハ一訴訟ノ継続進行  
ト看做スナリ故ニ更ニ委任ヲ受ルヲ要トセ  
ス本法第二百四十一条ニ依リ被告ノ承諾ヲ  
受テ為シ得ヘキ真実ノ訴訟變更又ハ本法第  
二百五十三条ニ依リ訴求ノ擴張ハ或ル場合  
ニ於テハ一ノ新訴訟ヲ為ス丁アルヘク後テ  
更ニ委任ヲ受ルヲ要スヘキ予ノ疑問アルヘ  
シ此疑問ニ付テハ宜ク本法第七十九条第二

解ヲ参看スヘシ

之ニ及シ占有権ヲ請求スル訴訟ト占有ニ関  
スル訴訟トハ本法第二百三十二条ニ依リ全  
ク別異ナル訴件タルヲ以テ別ニ委任ヲ受ル  
ヲ要スルナリ  
本文第七十七条第七十八条ハ惣理委任ヲ以  
テ処理シ得ルノ趣義ナルハ固トヨリ論ヲ俟  
タス

第七十九条

訴訟上委任ノ制限ニ関スルノ  
條

法律上代理委任ノ範圍ヲ制限スル丁ハ和解シ

テ訴訟ヲ止メ訴訟物件ヲ拋棄シ又ハ相手人ノ  
請求ヲ承認スル事項ニ限り相手人ニ対シ法律  
上ノ効力アルモノトス

代理人ノ代理ヲ必要トセサル時ニ限りテ訴訟  
上ノ各所為毎ニ委任ヲ為スルヲ得

(第一解理由ノ説明)

本法草案ハ委任契約ノ

内部ノ判断即チ委任者ト受任者間ノ権限ノ

関係ニ付テハ之ヲ現行法制ニ推譲スルヲ原

則ト為シタリ是ニ於テ委任本人ハ其訴訟代

理委任ニ付キ権限ヲ伸縮スルハ一ニ自己ノ

意見ニ依リ得ル所ニシテ而カモ受任者ハ本

人ニ対シ委任ニ背キタル訴訟上ノ所為ノ責

任ニ当ルヘキ程度ニ至テハ之ヲ民法ノ規則

ニ委ヌルナリ然レモ受任者ノ訴訟相手人ニ

対スル関係ハ自ラ之ニ異ナリ本草按ニ於テ

ハ訴訟代人ノ権限ヲシテ法律上代理セサル

ヘカラサル権限スルニ至ラシメハ審理上ニ

大ナル波滯困厄ヲ来シ且相手人ニ損失ヲ被

ムラシヘカラントノ趣義ニ基ツキ乃チ字漏

生國訴訟法草案第百三条ハノール國全草

案第百条北部独乙聯邦草案第百三十六条ト

其趣義ヲ同フシテ法律上委任権限ノ制限ニ

シテ相手人ニ対シテハ和解拋棄承認ニ因テ

訴訟ヲ停止スルヲ制限スルノ外ハ法律上其

効力ナキ了ニ規定シテ以テ商法ノ範圍商法  
第四十二條第四十三條第百十六條第百三十  
八條第百三十一條其他千八百六十八年七  
月四日頒布ノ殖産經濟協會ニ関スル法律第  
二十三條ニ於テ採用スル主義ニ依リ訴訟上  
ノ必需ヲ補充シ交通上ノ安固ヲ保護スルヲ  
得タリ

又孛漏生國草案第百三條ハノール國全上  
第百條北部独乙聯邦草案第百三十六條ト同  
一ノ主義ヲ取り訴訟代理委任権ハ訴訟ノ全  
部ニ亘ルヘキ原則ニ基キ本人訴訟ニ於テハ  
訴訟上所為ノ各事項ニ付テ委任ヲ為シ得ル

ノ例外ヲ定メタリ

第二解制定ノ沿革 北部独乙聯邦草案第百

三十六條ニハ本條ノ第二項ノ規則ヲ明示シ  
アレモ其第一項ニハ委任権限ノ制限ハ對手  
人ニ對シ渾ヘテ法律上無効ナリト明示ス之  
ニ及シ孛漏生國草案第七十七條ハ本條第一  
項ト同フシテ但本條第二項ノ規則ヲ掲ケス  
而テ何故ニ北部独乙聯邦草案ニ有フセサリ  
シ事由ニ付テハ其理由説明中ニ解説シアラ  
ス此他ノ草案ハ皆同一ナリ抑本條ノ國議院  
委員第一讀会ニ於テ訴訟變更ノ場合ニ付テ  
モ此制限アラシク欲スルノ動議アルモ理

論上又ハ實際上ニ於テ不可ナリトシテ採用  
 セラレサリシ蓋訴訟更正ト訴訟變更トハ往  
 ヲ弁別シ能ハサルノ実アルナリ其第二読会  
 ニ於テハ別ニ異論ナカリキ  
 前記ノ動議ノ議場ニ發シ又之ヲ排斥シタル  
 ニ由テ觀レハ即チ本法第七十七條ハ訴訟代  
 人ニ實ニ訴訟變更ヲ果行シ且變更セント為  
 スノ権利アルモノト定メタル所ナリ然ラサ  
 レハ此ノ如キ制限ニ付テ議論ヲ生スヘキ理  
 由アラサルナリ  
 第三解本條ニ對スル危虞 代言者流ノ位置  
 ハ最モ榮譽アル貴重スヘキモノタルニ拘ハ

ラス取テ本條ニ付テ危惧ノ念アルヲ免カレ  
 サルナリ加之商法トハ自ラ其對等ヲ失フヘ  
 シ蓋商估ハ數年間使用シテ實驗シタル者ニ  
 支配人タル管理權ヲ授クト虽モ民事訴訟人  
 ニ至テハ一面ノ識ナキ代言人ニ依頼セサル  
 ヘカラサル丁徃々ニシテ然リ況ヤ如何ニノ  
 族流ニ在テモ必スヤ信用シ易カラサル人物  
 ナキニ非ラスシテ且二三ノ邦國ニテハ僅ニ  
 兩三ノ代言人ノシ訟廷ニ出ルヲ得ルノシ為  
 メニ本人ハ選任スルノ餘地ナキニ於テオヤ  
 殊ニ代言人ニシテ其自任スヘキ責務ヲ無價  
 値ニ經過セシメサル丁徃々ニシテ見ル所ノ

実況ナルナリ言ハ被代  
言人其本  
アルニ背  
意キ然ラ  
 サルモ本人ハ自己ニ別ノ事由アリテ委任権  
 限ヲ制限セシムルヲ企望スルモノ勘カラス此  
 場合ニハ之ヲ許スヲ可トスヘカラン殊ニハ  
 是レ後來ニ薰染セル法義心ニ於テ之ヲ便宜  
 ナリト為スノミナラス旧来口頭対審制ノ行  
 ハル、邦國ニ於テハ復タ未タ此革新ノ必需  
 ヲ感起セサル所ニ非ラス乎

(第四解 委任権ノ制限) 蓋委任権ノ制限ニシ  
 テ相手人ニ對シ法律上有効ナルハ本条第一  
 項ニ明記スル数点ノ外ニ出テスシテ且必ス  
 相手人ハ之ニ付キ通示ヲ受ケサルヘカラサ

ルナリ元来ノ規則ニ於テハ已ニ本法第七十  
 七条ニ見ルヘキ如ク委任権ハ更ニ制限スヘ  
 カラサルヲ以テ例ト為スカ故ニ其例外ヲ明  
 カニ利用セサル限リハ相手人ハ無制限ノ委  
 任権アルモノト看認ムヘキナリ  
 委任権ノ通示ヲ為シタル後本条ノ制限アル  
 了ハ別ニ本人ヨリ申告スヘキナリ而テ其効  
 用ニ付テモ復タ本法第八十三條ノ規則ニ後  
 ハサルヘカラス  
 本条第一項ノ成規ハ独リ本法第七十四條ノ  
 代官人訴訟ニシテ關係ヲ有スルニ非ラス尚  
 ホ本人訴訟(本法第七十四條第七十五條ニ對

スル第六解参看ニシテ本条第二項ニ明示スル如キ其各所為ノ止ラサル所ノ訴訟上委任ニモ及ホスヘキナリ此本人訴訟ノ各所為ニ付テ為ス委任ヲ外ニシテハ仅令本人訴訟ナリモ代理人ヲ用フル以上ハ即チ本条第一項ニ明示スル事項外ニ制限ヲ為シテ委任スルヲ許サ、ル所トス

(第五解訴訟法ノ各所為) 本条第二項ノ例外規則ハ固トヨリ單ニ本人訴訟ニシテ對スルモノナレモ復タ代言人訴訟ニ付テハ必ス訴訟上全般ノ所為ニ付テ委任セサルヘカラサル、意ヲ示シタルナリ

本人訴訟ニ付テ各所為ニ付キ為シタル委任ノ効用ノ度ハ其委任シタル権限ニ從テ異同アルヘシ本法第七十七條ハ之ニ適用スヘカラス(本法第七十七條第七十八條ニ對スル第三解参看)但代理委任ヲ對審ノ席ニ付テ為シタル場合ニ付テハ第八十一條ヲ適用スヘシ

第八十條 (代人数名アル時ニ関スル條) 代人数名アル時ハ共同ニ又ハ各別ニ本人ヲ代理スル権アリ之ニ背及スル代理ノ規定ヲ為ス時ハ對手人ニ對シ法律上其効ナキモノトス

(第一解理由ノ說明) 本條ノ數名ノ代人本人



ヲ共同ニ又ハ各別ニ代理スルノ権アリト定  
メタル規則ハ訴訟ヲシテ確實迅速ニ結了シ  
易カラシムルノ趣義ナリ素ト此規則ハハノ  
一フル國草按第百二条北部独逸聯邦草案第  
百三十七条ニ出ル所ニシテ「ウエルテムベルク」  
國訴訟法第百二十四条ニ同シ又「サクセン國  
草案第百五十三条ニ於テモ此起案アルナ  
リ此他字漏生内國通法第一篇第十三章第二  
百一条及「商法第百十四条第百六十七條第  
百九十六條ニ於テモ同一ノ規定アリ而テ本  
条第二段ノ規則ハ即チ本法第七十九條ニ定  
メタル原則ヲ敷衍シテ数名ノ訴訟代人ヲ委

任スルモ尚ホ彼ノ委任上訴訟ノ全般又ハ各  
所為ノ意ニ批ラスシテ全般及「各項ノ委任  
ヲ別異ニ為スキハ對手人ニ向テ法律上無効  
トナスナリ」(本法第百五十七條第三項第百七  
十二條第一項參看)商法第四十一条第三項第  
八十六條(四)第百条第百十五條ハ本条ニ抵觸  
シアルト虽モ尚ホ現ニ行ハルヘキ所以ハ即  
チ実施條例第十三条ニ照シテ明瞭ナリ  
第二解制定ノ沿革 北部獨逸聯邦草案第百  
三十七條ニ於テハ本条ノ末段ノ規則ヲ單ニ  
代言人訴訟ニ限定セリ此他ノ草案ハ皆本条  
ニ同シ國議院委員會ニ於テハ異議ナク採用

セリ

第三解 数名ノ代人

本条併ニ本法第八十七

条ノ末段ニ依テ独乙普通法ノ規則ニ於ケル  
ト同シク本人ハ一時ニ又ハ順次ニ数名ノ代  
人ヲ任用シ得ルナリ「バ」テニ國ノ裁判年報ニ  
ハ之ヲ許サ、リシ判決例ヲ載ス而テ数名ノ  
代人ヲ任用シタルニ因テ生スル費用ニ付テ  
ハ本法第八十七条ヲ参看スヘシ  
乃チ对審期日ニ於テ数名ノ代人一時ニ参席  
スルヲ得ヘシト虽モ裁判所ハ本法第二百十  
七条ニ照シ事件ノ陳述ヲ結了シタル時ハ即  
チ審理ヲ停止スル權ヲ有ス

送達 本法第一百六十四条参看ハ数名ノ代人ノ

一名ニ為スモ完全ナル効力ヲ有ス何ントナ  
レハ本条ニ依リ各自代理權アル者ナレハナ  
リ尚ホ本法第一百五十七条第三項ヲ参看スヘ  
シ

然レ氏若シ数名ノ代人別異ノ供述ヲ為シ例

ヘハ一人ハ对手人ノ主張ヲ承認シ他ノ一人  
ハ之ヲ駁シ又一人ハ和解シテ解訟セント為  
シ他ノ一人ハ之ヲ抗争スル等ノ事アルニ方

テハ疑義ナキニ非ラスト虽モ其对手人ノ主

張ニ関シテハ乃チ本法第二百十九条ニ依  
テ之ヲ処理シ得ヘク其他ノ場合ニ於テハ元

未各自完全ナル代理権アルカ故ニ其一人ノ  
執行シタル所為ニ対シテハ他ノ抗争ハ成立  
タサルモノト為スナリ

(第四解本人訴訟) 北部独乙聯邦草案ノ別異  
スル所(上ノ第二解参看)ハ即チ本条全部ノ規  
則ハ本人訴訟(本法第七十四条第七十五条ニ  
対スル第六解参看)ニモ及ホス所ニ在リ然レ  
モ是レ必ス一訴訟ノ全般ニ付テ代人ヲ任用  
シ又ハ一訴訟ニ数名ノ代人ヲ任用シタル場  
合ニ関スルノミ又本法第七十九条第二項ノ  
規則ニ後ヒ一訴訟ノ各所為ニ対シ各別ノ代  
人ヲ任用シ得ヘシ此場合ニ於テハ各其受任

ノ事項ニ付テハ自立スルモノナリ

(第五解商法上ノ代人) 本条第一解ニ挙述セ  
ル商法ノ規則(彼ノ列載セル条ノ外尚ホ第二  
百二十六条ヲ加フヘシ)ハ單ニ本人訴訟ニ於  
テ、其効力アリ必竟商法上代理人ハ代言  
人訴訟ニ於テ自ラ出廷シテ訴訟ヲ為スラ許  
サレサレハナリ又本条ハ実施条例第十三条  
ニ依リ商法ノ代人ト本人訴訟ニ於テモ全ク  
異ナル所アリ乃チ商法ニ謂フ所ノ共同支配  
人及ヒ共同代理人ナルモノハ其一人ヲ欠ク  
モ尚ホ処理ノ権ヲ具足セサル性質ノモノナ  
レハナリ

第八十一条 (代人ノ代理権ニ関スルノ条)  
代人ノ為シタル訴訟上ノ所為ハ本人ニ対シ本人自ラ為シタル所為ニ同シク其義務アルモノトス代人ノ為シタル供述及ヒ他ノ事実ノ説明ハ共ニ出廷スル本人直チニ之ヲ取消シ又ハ更正セサル限りハ本人ノ為シタルト同シキ効アリ  
(第一解理由ノ説明) 本条ハ訴訟代人全ク本人ヲ代理スル時ニ付テ定ムル所ニシテ即チ其委任ノ権限タルヤ本法第七十七条乃至第七十九条ノ規則ニ準シ完全ナル以上ハ受任者ノ所為又ハ為サ、ル行為ハ皆本人ヲシテ其責ニ任セシムルナリ而テ本条ニ於テ訴訟

上ノ所為ニ付キ其代人ノ為シタルモノハ本人ノ為シタルモノト同ク其義務アルコトヲ明言シ只旧代言条例ノ趣義ヲ少ク参酌シテ其代人ト共ニ出廷スル本人代人ノ為シタル供述及ヒ事実ノ説明ニ関シテハ直チニ之ヲ取消シ又ハ更正スルノ権利ヲ本人ニ與ヘタリ而テ其之ヲ取消シ又ハ更正セントスル本人ノ異見ヲ申立ル期限ハ裁判官ノ意見ニ任カセ各場合ニ從テ差異スルヲ得ルナリ又代人ノ為サ、ル行為ニシテ本人其責ニ任スヘキコトハ本法第二百十條第二項ニ依テ見ルヘキ本条ト同義ナルハ、ハノール國草案第百三

条北部独乙聯邦草案第百三十八条ウレテ  
ムベルグ國訴訟法第百二十五条トス尚ホ「バ  
イルン國訴訟法第九十条第二項ヲ參看スヘ  
シ

(第二解制定ノ沿革) 各草案皆同一ナリ而テ  
國議院委員會ニ於テ惣体ノ動議ハ之レアラ  
サリシモ其第一談會ニ於テ一議負ハ本条ヲ  
更ニ明瞭ナラシムル為メ代人ノ次ニ第七十  
七条ニ明示スル範圍内ニ於テノ數語ヲ挿入  
セントノ議ヲ提出シタリ然ルニ内閣代理負  
ハ本条ニシテ動議ノ範圍内ニ於テ為ス所為  
タル制限ヲ指スハ固トヨリ論ナク且概シテ

他ノ規則ヲ指示シテ相参照セシムル丁ハ努  
トメテ譯ケテ為サ、ルヲ原則ト為ス旨ヲ陳  
弁シ遂ニ動議ハ消滅シタリ

(第三解代理權) 蓋本条ハ軌近世ニ行ハル、  
所ノ代理權制ノ現ニ為スヘキ行為ニ関スル  
律義ヲ訴訟代人上ニ応用シ又本法第二百十  
條第二項ニ於テハ同一ノ主義ヲ以テ其為サ  
ル行為ニ関シテ規定シタルナリ  
乃チ代人ノ本法第七十七條乃至第七十九條  
ノ範圍ニ於テ為シ又ハ為サ、ル行為ハ渾ヘ  
テ本入自ラ之ヲ為シ又ハ為サ、ルト同一ノ  
効ヲ生スルナリ是ニ於テ供述及ヒ事實ノ説

明ニ付キ後日代人ノ為シタルモノナリト云  
フヲ以テ取消シ得サルナリ之ニ及シ独乙普  
通法サクセン國バテン國ノ法制ニテハ之ヲ允  
ルセリ然レモ本法第二百六十三條第四百二十三  
條ハ又爰ニモ適用スヘシ

(第四解例外) 本人若シ对審期日ニ出廷シア  
リテ直ニ取消シ又ハ更正ヲ為スキニ限リ其  
代人ノ為シタル供述及ヒ事實ノ説明ヲ除却  
シ得而テ第一解ニ援用セル独乙普通法ノ(旧  
代言条例ノ三日間ノ期限ハ之ヲ採ラスシテ  
其時期ハ一ニ裁判官ノ斟酌ニ任カセタリ)上  
ノ第一解然レモ直チニナル語ヲ以テ之カ制

限ヲ為セリ

第八十二条 (代理委任契約ノ終期ニ関スル  
ノ條)

委任者死亡シタル時又ハ其訴訟能力若クハ法  
律上代理權ニ變動ヲ生シタル時ト虽モ其委任  
ハ消滅セサルモノトス但其代人訴訟中止ノ後  
更ニ相続人ノ代人トシテ訴訟ヲ継続スル時ハ  
相続人ノ委任ヲ受ケサル可カラス

第八十三条 (同上)

代理委任解約ノ申込ハ委任解除ノ通知ニ因リ

又代言人訴訟ニ於テハ更ニ代言人ヲ任定シタ  
ル丁ノ通知ニ因リ對手人ニ對シ初テ法律上具  
効アルモノトス

代人ハ自ラ其代理ノ解約ヲ申込ムト虽モ本人  
他ノ方法ニ依テ其權利ヲ保護スルニ足ルマテ  
ハ仍ホ事務ヲ所理スルヲ妨ケス

(第一解理由ノ説明) 本文第八十二條第八十  
三條ハ現ニ之ヲ必要スルヲ以テ代理委任ノ  
終期ニ付テノ規則ヲ定ムル所ナリ

最近ノ帝國宣令ノ第九十九條ニ依レハ訴訟  
代人ノ委任狀中ニハ必ス相続人ノ代理ヲ兼  
続スヘキ丁ヲ明記スルヲ要ト為シ又「ブラウ

ンシュヴァイヒ國訴訟法ノ委任狀程式ニハ更ニ  
委任者ノ相続人ニモ委任ヲ為シ置クヲ例ト

シ殊ニ「バテン國訴訟法第百四十二條ニテハ  
必ス之ヲ為サ、ルヘカラサルナリ」之ニ反シ

字漏生内國通法第一篇第十三章第百八十六  
條ノ民法上ノ例外規則トシテ其第百九十二

條及ヒ全國裁判通則第一篇第三章第五十九  
條ニ於テハ已ニ訴訟代理委任ハ本人ノ死亡

ニ因テ消滅セサルモノト定メアルナリ「ハノ  
一フル國訴訟法第七十三條ウユルテムベルグ  
國全上第百二十六條オルデンボック第五十  
一條第一バイルン國全上第九十三條ハ委任

状中ニ相續人ノ羨續スルヲ明記スルヲ要  
セスレテ概シテ訴訟代理ノ委任ハ相續人ニ  
モ亦有効ノ委任ト為スラ例トナセリ蓋本法  
ハ商法第五十四条第二項ノ趣義ニ基キ更ニ  
孝漏生國草案第七條ハノール國草案第四百  
條北部獨乙聯邦草案第三百三十九條ニ倣ヒ訴  
訟能力又ハ法律上委任權ノ變動ニマテ及ホサレメ  
タリ而テ孝漏生國草案第七條ニ於テ明記スル  
ルガ國訴訟法第二百二十六條ニ於テ明記スル  
カ如ク委任シタル婦人結婚シタル為メ訴訟  
代理委任ノ變動セサルヲハ即チ本法第五十  
一條第二項ニ因テ明晰ナリ何ントナレハ結

婚ハ婦人ノ訴訟能力上ニ影響ヲ及ホサル  
ヲ以テナリ又本法第二百二十三條ハ其訴訟  
代人ヲ以テ代理セシメアル訴訟ニシテ本文  
ニ明示スル場合ニ於テ審理ヲ中止セサル時  
ニ於ケル本文第八十二條ノ結果ナリトス  
第二解制定ノ沿革 北部獨乙聯邦草案第百  
三十九條ハ本法ノ第八十二條ト同シト虽モ  
特リ其未段ノ明文ナシ又其第四百四十四條第  
百四十五條ハ本法第八十三條ノ趣義、外尚  
ホ委任者ト受任者トノ關係殊ニ受任者解任  
ノ申立ヲ為ス權利ニ付テハ民法ノ規則ニ後  
フヘキ主義ヲ明掲シアルナリ本法第七十九



條第一解及ヒ下ノ第五解參看此他ノ草按ハ  
悉ク一齊ナリ

第八十二條ノ國議院委員ノ第一讀会ニ於テ  
訴訟代人ハ其資格上ノ變動ニ付テハ一ト對  
手人ニ直ニ通知スヘキ義務アルト定メ  
トノ動議ヲ提出シタリ然レモ不完全ノ法律  
ヲ制定スルヲ厭ヒ且其通告ヲ怠リタルカ為  
ノ権利上ニ損害ヲ被ラシムル如キ要迫ハ為  
スヘカラサルヘシト云フヲ以テ動議ヲ排斥  
シタリ又第八十三條ニ付テノ第二讀会ニ於  
テ代人自ラ解約スル時ハ代人訴訟ニ於テ  
ハ之ヲ一時継続スルノ義務アルモノ定メ

ントノ動議アリシモ其義務アリト定ムル  
ハ彼ニ民法ヲ侵スヲ以テ此動議ヲモ排斥シ  
タリ此他ハ兩條共ニ動議ノ提出ナカリシ

第三解委任者

受任者死亡スル時又ハ訴訟

能カラ失フタル時ニ付テハ民法ノ定ムル所  
ニ後ス本法第七十九條第一解係ニ本條第二  
解參看又代人其資格ヲ失フタル時ニ付テ  
ハ當時仍ホ聯邦法ニ後フナリ本法第七十四  
條第七十五條ニ對スル第四解參看然レモ此  
場合ニ於テハ必ス訴訟ノ審理ヲ中止スルナ  
リ本法第二百一十一條參看  
委任効力ノ委任者ノ相續人ニ移リテ法律上

之ヲ継続セシムルハ即チ其委任者ノ对審期  
日前ニ死亡シタルニ拘ハラス上訴ヲ為シ又  
ハ上訴ヲ継続スルヲ得セシムルニ在リ  
訴訟能力ニ関スル變動本法第五十条以下参  
看ハ仮令委任者之ヲ失フ氏又本人之ヲ得ル  
ニ至ル氏又ハ再ヒ之ヲ得タリ氏渾ヘテ影響  
ヲ生セス即チ其本人ノ委任或ハ其法律上代  
人ノ委任ヲ継続スルナリ盖本文第八十二条  
ノ明文ハ訴訟能力ナキ本人カ委任スル趣義  
ヲ明示セサルヲ以テ甚タ解シ難キナリ然レ  
氏第一解ニ依レハ北部独乙聯邦草案第三百  
十九条ノ意ナルヲ知ルヘシ其明文ハ即チ

代理委任ハ其委任者死亡シ若クハ訴訟能  
カヲ失ヒ又法律上代人アリテ委任シタル  
本人訴訟能力ヲ有スルニ至リ若クハ他ノ  
代人ニ交代シタル場合ト虽モ為メニ停止  
セサルモノトス  
トアルナリ  
必竟本条ノ明毫ナラサルハ其文章ヲ簡約ナ  
ラシメタルニ失セルモノト云フヘシ  
第四解新委任 本文第八十二条未段ノ規則  
ハ本法第二百二十三条ニ依リ審理ノ中止ハ  
訴訟人ノ申立ニ因テ為スノ義ヲ示シタルナ  
リ

第五解解約ノ申込 本文第八十三條ニ対ス  
ル理由説明ニ依レハ即チ曰

委任解約ノ申込ヲ為ス権利ニ付テハ民法  
ニ於テ之ヲ定ム本法第七十九條第一解參  
看而テ本條ハ只受任者自ラ解約ヲ申込ニ  
又ハ委任者解約ヲ申込ニタルニ因テ訴訟  
代人ノ辭ニ去ル場合ニ方テ訴訟ノ進行殊  
ニハ對手人ノ為メ因波ヲ来サシメサルヲ  
期シテ規定シタルノ是ニ於テ乎即チ復  
々高法第四十六條ニ倣ヒ此第八十三條ニ  
於テ委任解約ノ申込ハ其委任解除ノ通知  
ニ因リ又代言人訴訟ニ於テハ本法第七十

四條參看別ニ代言人ヲ任定シタルノ通

知ニ因テ其外部ニ對シテ初テ法律上効力  
ヲ生ス可シト規定シ孛漏生國草案第百八  
條ハノールフル國草案第百八條北部独乙聯  
邦草案第百四十五條バイルン國訴訟法第  
九十四條ウユルテムベルグ國全上第百二十  
七條法朗西國全上第七十五條ト其趣義ヲ  
同フス而テ此届出アルマテハ原ノ代人ニ  
送達ヲ為シテ其効アルヘキナリハノール  
ル國訴訟法第七十九條參看  
又第八十三條第一項ニ付テハ其解約ヲ申  
込ニタル代人ヲシテ本人其權利ヲ或ル方

法ヲ以テ保護スルニ至ルマテ仍然事務ヲ  
処理セシメテ以テ実行シ得ヘキナリ必竟  
此義務ハ代人タル者不相当ノ時期ニ於テ  
解約ヲ申込ムラカサ、ル通義ニ本ツク所  
トス又代言人此義務ヲ怠リタルニ因テ本  
人ニ対シ負フヘキ責任ノ度ニ至テハ各聯  
邦ノ現行法ニ後テ判定スヘキナリ  
第八十三條ノ通知ハ即チ本法第百五十五條以  
下ノ規則ニ後ニ昏面ヲ對手人ニ送達シ其謄  
本ヲ裁判所昏記ニ出シ置キ本法第百二十四  
條參看又治安裁判所ノ事件ニ付テハ本法第  
四百六十二條第四百六十三條ニ後ニ裁判所

昏記ノ調昏ニ登記スルヲ以テ果行スルナリ  
前項ニ援引セル理由説明ノ第二項ニ解説ス  
ル所ハ本條第二解ニ挙述スル動議ノ反駁ニ  
較フルニ必竟一ノ理論上ノ趣義ニ過キサル  
ヘシ何ントナレハ第八十三條第二項ニ就テ  
觀ルニ啻ニ受任者ノ權利ニ付テ明示スルノ  
ニニテ一モ其義務ヲ挙ケタルニ非ラサレハ  
ナリ然レモ不相当ノ時期ニ於テスル解任ノ申  
込ニ付テハ彼ノ理由説明ニ説ク所ノ主義ニ  
於テ民法上判断スルナルヘシ法朗西民法第  
二千七條第二千十條孛漏生内國通法第一篇  
第十三章第百七十二條以下サツクセン國民法

第一千三百二十二条 独乙普通法代人 条例第十  
一条ヲ参照スヘシ

此故ニ第八十三条第二項ヲ以テ受任者ヲシ  
テ其民法上ノ義務ヲ尽サシメ得ルハ必要ト  
為ス所ナリ

而テ此第二項ハ只ニ受任者ヨリノ解約申込  
ニ付テノミ明示シ他ノ受任者ニ因スル委任  
消滅ノ事由ニ付テハ各場合ニ依テ之レカ判  
断ヲ為スヘキモノニシテ例ヘハ代言營業權  
ヲ失フタルキノ如キハ直テニ代人權ヲモ失  
フナリ

又委任者ヨリ解約ノ申込ヲ為シタル以上ハ

其之ヲ闕陳シタルヲ以テ内部ノ委任權ハ消  
滅シ即チ代理スルノ權利義務共ニ茲ニ停止  
ス然レモ外部ニ対シテハ第八十三条第一項  
ノ果達スルニ至ルマテハ仍然繼續シ即チ受  
任者ハ其解任ノ申込アリタルニ拘ハラズ仍  
然代人ニシテ而カモ其為シタル行為又ハ為  
サ、ル行為ニ付テハ本法第八十一条ニ準拠  
スヘキナリ抑解任ノ申込ヲ得レハ受任者ハ  
更ニ代理スヘキ義務ヲ有セサルモノナルカ  
故ニ委任者必ス受任者ニ申込ムト同時ニ对手人ニ  
通知シ且自己ノ代理ヲ缺カシムル丁勿カラ  
ンヲ要スヘシ

第八十四條 (委任ノ調査ニ関スルノ条)  
委任ノ缺漏ニ付テハ相手人訴訟中何時モ之ヲ  
難詰スルヲ得  
裁判所ハ代言人ノ代理スルヲ必要ト為サ、ル  
時ニ限リ其職権ヲ以テ委任ノ缺漏ニ付キ調査  
ス可シ

(第一解理由ノ説明) 独乙普通訴訟手續(即チ  
旧時ノ訴訟人調査条例)及ヒ字漏生國訴訟規  
則其他オルデンボルク國訴訟法第五十五條  
バデン國全上第百三十六條ウウルテムベルグ  
國全上第百十五條サツクセン國全草案第三百

四十一條ニ依レハ即チ委任ノ缺漏ヲ審調ス  
ルハ裁判所ノ職権ヲ以テ為スナリ今本法ハ  
此律義ヲ本人訴訟ニ付テノニ採用シテ反テ  
代言人訴訟ニ付テハ職権上審査スル規則ヲ  
全ク採用セス

抑本条ノ代言人ノ代理ヲ要セサル訴訟ニ付  
テ其委任ノ缺漏ヲ審査スルハ裁判所ノ職権  
ニ於テスル規則ハハノール國訴訟法第七  
十四條ヲ除キ現行ノ法制ニ符合シアリテ而  
カモ其以テ理由ト為ス所ハ即チ代言人訴訟  
ニ非ラサル訴訟ニ於テ代理委任ノ缺漏ニ付  
テ職権ヲ以テ審査スルハ必竟適當ノ委任ナ

キ者ヲ徒ラニ審判スルノ勞ヲ必然防遏スル  
ニハ唯一ノ適切ニシテ簡便ナル方法ナリト  
云フニ在リ之ニ及シテ代理人ニシテ代理スル  
場合ニ付テハ自ラ別異ナルヘシ乃チ代理人  
ナル者ハ其委任ヲ互ニ審査照合スルノ才能  
ヲ有スルノミナラス既ニ其位地ニ於テ此審  
査ヲ成規ニ準シ為シ得ルノ保証ヲ為スニ足  
ルモノナリ是ニ於テ乎即チ代理人訴訟本法  
第七十四條ニ於テハ「オールドンボウル」ク國訴訟  
法第五十五條バデン國全上第百三十六條ノ  
主義ニ及対シテ職推ヲ以テ委任ノ審査ヲ為  
スラ要セスシテ却テ之ヲ原被告ニ委ヌルノ

規則ヲ妥當ト為スナリ乃チ裁判所ハ只原被  
告間ニ委任上ニ付キ紛争ヲ生スルニ方テ之  
カ審査ヲ為シ其他ハ對手人ヨリ委任ノ缺漏  
ヲ難詰スルマテハ其代人タル代理人ハ本  
ヨリ適當ノ委任ヲ受ケアルモノト認定ス可  
キモノトスハノール國訴訟法會議筆記錄  
參看又本法ニ於テ代理人訴訟ノ委任ヲ審査  
セサル規則ハ法朗西訴訟法ハノール國全  
上第七十四條バイルン國全上第八十九條其  
他ノ訴訟法草案ハノール國草案第百五條  
字漏生國草案第百四條北部獨乙聯邦草案第  
百四十條ニ相符合ス蓋各訴訟法及ヒ其草案

ハ本法ノ規則ニ異ナル所尠カラストハ虽モ是等ノ数法律ヲ実施シテ永ク經驗セル先蹤ニ拠テ本条ヲ制定シタリ

(甲) ハノール國訴訟法及ヒ同國草案北部独乙聯邦草案ハ代言人訴訟ニ於テモ職權ヲ以テ其委任ノ缺漏ニ付テ審査スルノ規則アリ但對手人其缺漏ニ付テ難詰スルノ時ヲ得サル場合ニ限レリ蓋此規則ニシテ實地ニ効用ヲ為スヘキハ即チ缺席審判ヲ為ス場合ニ在ルヘシ(北部独乙聯邦草案第四百三十四條參看)然レモ恰モ此缺席審判ノ如キ手續ニ於テハ努トメテ短簡ヲ貴トヒ此ノ如キ急速ニ缺

席裁判ヲ為スノ妨障タルヘキ規則ハ概シテ之ヲ避ケサルヘカラサルナリ而テ本来缺席審判ノ性質ニ依レハ敢テ要セサルモノ、如シトハ虽モ其委任ノ職權上ノ審査ハ裁判ヲ遲延セシムルノ事由タルト性ニ之レアルヘキナリ

(乙) 本法第七十六條ノ規則ハ之ヲ「バイルン國法朗西國ノ訴訟法制ニ比スルニ大ニ優レル所アリ」(本法第七十六條第二解參看)即チ理由説明ノ末段ノ明文ニ曰

本法草案ニ於テハ裁判所本人訴訟ニ於テ其職權ヲ以テ委任ノ審査ヲ行フヘキ時期



供 = 訴訟人ノ相手人 = 委任ヲ提示スヘキ  
時期 = 付テ明瞭ナル規則ヲ揭示セリ本法  
第七十六條第五解參看而テ之 = 関スル字  
漏生國草案第九十三條第九十四條北部独  
乙聯邦草案第四百十條第三項ノ規則ハ無  
用 = 屬ス然シ下ノ第二解參看又裁判所ハ  
本人訴訟 = 於テ本法第七十四條第七十六  
條 = 對スル第六解參看口頭對審 = 方リ委  
任 = 付キ審査スル丁ハ即テ本法第三百十  
條第二項及ヒ第三百條一 = 於テ明カナリ  
對手人ハ何時 = テモ委任ノ缺漏 = 付テ難  
詰シ得且本法第七十六條 = 掲ラル証明ヲ

請求シ得ヘシ

(第二解制定ノ沿革)

北部独乙聯邦草案第百

四十條ノ別異スル所ハ其第二項第三項 = 在  
リ而テ第二項 = 付テハ上ノ第一解(甲)ヲ參看  
ス可シ其第三項ノ明文ハ  
委任状ハ其原本ヲ以テ對審ノ初回 = 裁判  
所 = 提出シ代言人訴訟 = 於テハ代言人ノ  
呈出スル第一回ノ背面 = 添付シテ提出ス  
可シ

トアルナリ此第三項ノ趣義ハ我第七十六條  
第一項中 = 多少採取セラレアルナリ  
此他ノ各草案ハ本條ノ明文 = 同シ

國議院委員ノ第一讀會ニ於テ委任ノ審査ニ付テハ代官人訴訟ニ於ケルモ本人訴訟ニ於ケルト同カラシメントノ動議アリ又第二讀會ニ於テ委任ノ職權上ノ審査ヲ本人訴訟ニ於テ為スヲ裁判所ノ意見ニ任カセントノ動議アリタリ而ツナカラ採用セラレスシテ止メリ

(第三解對手人ノ難詰權) 抑委任ノ缺漏ニ付キ對手人カ難詰ヲ為シ得ルハ代官人訴訟及ヒ本人訴訟ニ於テス可ク且委任ニ関シ各種ノ缺漏ヲ難詰シ得ルナリ即チ當ニ其全ク之ヲ受ケアラサル時ノシナラス尚ホ委任狀ノ

缺漏又ハ証明ノ不完全候ニ為スヘカラサル制限ニ付テモ之ヲ難詰スルヲ得是故ニ難詰ハ必スシモ恒ニ同一ナル効果ヲ為サルヘシ蓋委任ヲ缺キアルト云フノ抗辯ハ固トヨリ防訴ノ抗辯ニハ非ラス何ントナレハ本法第二百四十七條(六)ハ單ニ法律上代人(本法第五十條第四解參看)ニ付テ規定スル所ニシテ且本條ニ依レハ委任ニ関シテハ訴訟中何時ニテモ其抗辯ヲ提起シ得ルヲ以テノ故ナリ既ニ裁判ノ宣告ナリタル以上ハ本法第二百八十九條ニ依リ上訴シテ之ヲ更正スルノ他ニ術ナキナリ然レモ場合ニ因リテハ又本法

第六百八十六条ニ准拠シテ補助スルヲ得ヘ  
 シ其他本法第七十七条第八十条ニ対スル  
 第一解ノ趣義ニ依リ且保証抵当(本法第六百  
 九十一条(三)ヲ為シテ以テ救護シ得ヘキナリ  
 (第四解委任ナク代理シタル原被告) 委任ナ  
 ク代理シタル原被告ニ共ヘタル裁判ニシテ  
 勝訴トナリタル場合ニハ何時ニテモ之ヲ取  
 消シ得ヘク又其敗訴ト為リタル裁判ニ付テ  
 ハ通常ノ上訴又ハ本法第五百四十九条ニ拠  
 リ猶豫期限ノ経過ニ因テ生スル損害ヲ救護  
 スヘキ裁判取消ノ訴願ヲ本法第五百四十二  
 条四ニ於ケル如ク為シテ之ヲ取消シ得ヘシ

初審ノ裁判ノ宣告以前ニ原告ノ委任ナキ代  
 人ニ付テハ短簡ナル異議ヲ申立テ其審理ヲ  
 停止シ若シ又被告ノ代人トシテ出廷シタル  
 中ハ其代人ヲ交代セシメ得ルナリ

(第五解裁判官ノ職務代言人訴訟ニ於ケル裁  
 判官ノ職務ハ只ニ判決ヲ為スノ外ナラスト  
 虽モ上ノ第一解参看(本人訴訟併ニ本法第七  
 十四条第七十五条ノ第五解ニ準クル場合ニ  
 於テハ裁判所ハ必ズ其職權ヲ以テ即チ上ノ  
 第二解ニ挙述スル動議ヲ拒否セル理由彼ノ  
 理由説明ニ於テ詳説スル如ク訴訟ノ審査ヲ  
 監督セサルヘカラサルナリ然リ而テ裁判所

ハ又本法第八十五條ノ規則ニ依リ代言人訴訟本人訴訟共ニ一時仮ニ委任ナキ代人ヲ許容シ得ルノ権ヲ有ス

第八十五條 (依託ヲ俟タスシテ訴訟ヲ為ス

ニ関スルノ條)

本人ノ依託ナクシテ事務取扱人トナリ又ハ委任状ナクシテ代人トナル者ハ訴訟費用又ハ損害ノ為メ保証ヲ立テ若クハ之ヲ立テスシテ一時訴訟ノ事務ヲ取扱フコトヲ得但本人ヨリ承諾ヲ受ル為メ定メタル期限經過ノ後ニ非ラサレハ本案ノ終審裁判ヲ為スヲ許サス

本人口頭ニテ委任ヲ為シ又ハ訴訟ヲ為スコトヲ明許若クハ黙許シタル時ハ其代人ノ為シタル訴訟上ノ行為ハ本人自ラ為シタルモノト定メサル可ラス

(第一解理由説明) 本條ノ規則ヲ以テ或ル場

合ニ於テ本人ノ依頼ヲ受ケスシテ其事務取扱人トナリ又ハ委任状ヲ所持セシテ代人ト為ル者ヲ許容シ又ハ費用及ヒ損害ノ為メ保証ヲ立テ若クハ之ヲ立テシメスシテ此如キ代人ヲ許容スルコトニ付テハ裁判所任意ノ斟酌ニ委ヌル所ニシテ乃チ其委任ヲ未タ受ケ得ス若クハ適法ノ委任状ヲ提出シ得サル

場合供 = 本人不在若クハ他ノ事故 = 因リ自  
ラ其権利ノ保護ヲ為シ能ハサルヲ以テ第三  
者本人ノ依頼ヲ俟タス迫リタル損害ヲ救護  
スル場合ノ為メニ設ケタルノ規則トス  
盖此如ク妨碍アル者ノ為メ其对手人ノ権利  
ヲ為メニ傷クル丁ナクシテ救護スルノ方法  
ニ付テハ各種ノ訴訟法ニ後テ異同アルナリ  
而テ本法ノ規則ハ其大概ニ於テハ北部独乙  
聯邦草案按第百四十一条以下ノ規則ニ同シ又  
独乙普通法ニ於ケル保証ヲ立テシメテ对手  
人ヲ保護スル法制ハ仍然今ニ「ヴェルテムベル  
グ國訴訟法第百十六條ヲ以テ維持シマレ氏

字漏生國法制同國裁判通則第一篇第三章第  
二十六條後千八百三十三年十月十七日ノ宣  
令第四号ヲ以テ廢止スニ依テ之ヲ實際ニ經  
驗シタリシ更ニ効績ナキヲ以テ遂ニ廢棄シ  
テ採用セサルナリ  
必要ナル場合ヲ充タスヘキ範圍ヲ大ナラシ  
モンカ為メ會ニ代人タル者ハ其當ニ委任セ  
ラルヘシト認定セラレ得ヘキ人ニ止ラス(即  
チ「ハノーフル國訴訟法第七十六條オルデン  
ボウルク國全上第五十二條第二バテン國全上  
第百三十八條サツクセン國全草案按第三百三十  
八條ハノーフル國全草案第百六條參看尚且

允ッ本人ノ代理ヲ為シ得ヘキ者ニ付テ云フ  
、趣義ナリ(本法第七十四條第七十五條參看  
又本條ニ於テハ受ケタル委任若クハ忘ニ受  
ケ得ヘキ本人ノ承諾ニ付キ骨面又ハ本條ニ  
関スル原證書類ハノールフル國訴訟法第七十  
五條オールドンボール國全上第五十二條第一  
バデン國全上第百三十九條ハノールフル國全  
草案第百六條參看)ヲ提示シテ以テ之ヲ証明  
セサルヘカラサルノ要用ヲ規定セサルナリ  
若シ此如キ手續ヲ要スルモノトセハ則テ依  
託ナキ事務取扱人ヲ許容スル丁之レアラサ  
ルノミナラス復タ公然代言ヲ營業ト為ス者

ニ至テハ委任ヲ受ル丁ナク或ハ必然受クヘ  
キノ豫期確定シアラサルニ取テ自ラ進テ他  
人ノ訴訟ニ干渉スルノ理由ナク且其代人ト  
シテ出廷スル者ハ本人トノ關係ニ付テ多少  
ノ証拠ナキハ幾ント絶無ナルヘシト断定シ  
得ルナリ然リ而テ受許裁判所其一時ノ代人  
ヲ許容シタル以上ハ委任ノ相当セサルニモ  
拘ハラズ總ヘテ訴訟上ノ所為ヲ有効ニ為シ  
得且其對手人ヲシテ是レト訴訟ヲ為スヘキ  
ノ義務ヲ負ハシメテ以テ本案終審ノ裁判ヲ  
與フル追其審理ヲ為シ易カラシム  
然レモ本條ハ對手人ヲ保護スル為メ本人ノ

兼諾ヲ受クル為メ定メタル期限ノ經過スル以前ニ本案ノ裁判ヲ與ヘサルノ規則ヲ定メタリハノール國訴訟法第七十五條バデン國今上第百三十八條ハノール國今草案第百六條ハ本條ト同一ナリ而テ其猶豫期限ヲ空ク經過セシメタル以上ハ本人ニ於テ兼諾セサルモノト看認メ北部獨乙聯邦草案第百四十一條參看且此場合ニ於テハ本人ノ出廷セサリシモノトシテ処置ス即テ缺席審判ニ屬スヘキナリ(本法第二百九十五條以下參看裁判所ハ此如キ代人ヲ許容スルト否トハ其費用及ヒ損害ニ對スル保証ノ有無ニ後フテ

任意ニ斟酌シ得ルナリ  
本人單ニ口頭ヲ以テ委任シ又ハ訴訟ヲ為ス  
丁ヲ明諾若クハ黙諾シタル時ハ一時ノ代人  
ノ為シタル訴訟ハ本人ニ其効力ヲ及ホス可  
シ蓋此第一段ハ交通上ノ必需ニ因テ孝漏生  
法制中ヲ更正シ後令口頭ヲ以テスルモ委任  
シタル以上ハ其委任上為シタル訴訟ニ付テ  
ハ其訴訟物件ノ價額ヲ問ハス後日之ヲ口實  
トナシテ上訴シテ抗争スルヲ許ルサス又其  
第二段ハ即チ法律ニ背反シテ代理スル代人  
ニ對シテ為シタル審判ノ取消ニ関スル本法  
ノ原則(本法第五百四十二條四)ノ主義ト同一

ナルナリ本法第五百十三條(五)參看

委任ナキ訴訟代理ニ因テ其代人ト本人間ノ

権義ノ關係ニ付テハ訴訟法ノ範圍外ニシテ

聯邦ノ現行法ニ讓ルヘキハ当然トス本法第

七十九條第一解參看又本法ハ委任ナキ代人

遂ニ本人ノ承諾ヲ得サルキハ其訴訟ノ費用

及ヒ損害ニ付キ對手人ニ對シテ如何シノ責

任ヲ負フヘキ乎ノ民法上ノ問題モ亦之ヲ聯

邦ノ法制ニ推委スルナリ

(第二解制定ノ沿革) 北部獨乙聯邦草案第百

四十一條ニ於テハ本條第一項ノ末段ヲ更ニ

明瞭ニ示シアルナリ即チ曰

其之ヲ許ルスニ付テハ本人ノ承諾ヲ受ケ

來ル可キ期限ヲ定ム可シ其期限未タ經過

セサル以前ニ於テハ本人ノ承諾ヲ受ケ得

タル時ニ限り本案ノ終審裁判ヲ為スヲ得

若シ空ク期限ヲ經過セシメタル時ハ本人

其承諾ヲ拒ミタルモノト看做ス

トアリ而テ同草案第百四十二條ニ於テハ上

ノ第一解ニ於テ未タ断定セサル問題即チ委

任ナキ代人ハ其費用及ヒ損害ヲ負擔スヘキ

モノト定メ又其第百四十三條ニ於テ口頭委

任ニ付テ規定シアルモ委任ノ条件ニ於テ抵

觸セサル限リハ云々ノ文字ヲ挿入シテ承諾



ノ効力ニ付キ慎重ヲ加ヘタリ  
此他ノ各草案ハ皆本条ト同一ナリ  
國議院委員ノ第一讀会ニ於テ北部独乙聯邦  
草案第百四十二条ニ於ケル趣義ニ於ルノ動  
議ヲ提出シタリト虽モ民法上ノ事項ナリト  
シテ棄却セラレタリ第二讀会ニ於テ本案ノ  
終審裁判ナル語ニ異議アリシ即チ裁判ハ素  
ト具委任ナキ代人ニ與フルニ非ラスシテ更  
ニ關係ナキ本人ニ向テ言渡スモノナルニ因  
リ目的ヲ誤レルモノトノ意ナリ内閣代理負  
ハ本条ノ趣義ハ全ク異ナル旨ヲ答ヘテ后採  
用セラレタリ

第三解保証(上)ノ第一解第二項參看 其保証  
ヲ立ルノ方法ニ付テハ本法第百一条ヲ參照  
スヘシ抑本法ニ於テ本条ノ規則ハアレ氏別  
ニ委任ナキ代人ノ對手人ニ對シ費用及ヒ損  
害ノ補償ヲ為スヘキ義務(上)ノ第一解第二解  
參看ニ付テ明示シアラサルハ奇異ナリト云  
フヘシ蓋民法上何レニ在テモ之ヲ當然トナスナ  
リ(高法第五十五条參看)  
第四解本案ノ終審裁判及ヒ期限 已ニ理由  
ノ説明(上)ノ第一解第四項併ニ制定ノ沿革(上)  
ノ第二解ニ奉述スル如ク裁判所ノ許容セル  
代人ハ其委任ヲ受ケアラスト虽モ尚ホ本然

委任アル代人ト同等ナルナリ故ニ兼諾ノ  
ナキハ其本人ニ不利ニシテ相手人ニ利益アル  
効果ヲ為スヘシ即チ本法第八十四條第三  
解第四解ニ挙述スル所ハ爰ニモ相当ス是ニ  
於テ委任ナキ代人ニ代理セラル、本人ハ徒  
ニ坐視傍觀シ能ハサルヘシ後テ裁判所ハ其  
権内ニ任セラル、所ノ上ノ第一解第一項第  
三項參看委任ナキ代人ヲ許容スルニ付テハ  
頗ル慎重ヲ要スヘキ、義務アルモノトス  
必竟裁判所カ本条ノ規則ニ依テ処理スヘキ  
ハ即チ只本人訴訟ノ場合又ハ相手人本人訴  
訟若クハ代言人訴訟ニ於テ委任ヲ缺ク場合

即チ本条又ハ委任ヲ有セサル代人自ラ其実  
情ヲ供陳スル場合ニ在ル而已

本条第一項ノ末段ノ行文ハ本法第五十四條

第二項ノ明文ニ倣フタルモノニシテ而カモ

第二解ニ挙述スル如ク第五十四條ニ於ケル

ト齊シク解説セラルヘカラサルナリ第五十

四條第六解參看本条第一解ノ理由説明第二

項ニ於テ本条ノ趣義ハ北部独乙聯邦草案第

百四十一條ト同一ナリト解説スルニ因レハ

則チ該条ハ本条ニ比スルニ更ニ明瞭ナルモ

ノ如シ  
第五解口頭ノ委任及ヒ本人ノ兼諾  
本条ハ

即チ高法第三百十七条ノ主義ヲ採用シタル  
所ナリ而テ本人ノ承諾ハ又制限ノモノナル  
トアリ得ヘシ(北部独乙聯邦草按第四百十三  
条及ヒ本条第二解參看且其効力ノ訴訟上ニ  
及ホス所ハ各場合ニ後テ差異ス  
北部独乙聯邦草按第四百七十九条第二項ニ  
於ケル委任ナキ代人ヲ許容スルニ対シ裁判  
取消ノ上訴ニ非ラサル他ノ上訴ヲ為シ得ル  
規則ハ本法ニ於テ之ヲ採用セス然レモ場合  
ニ依テハ例ヘハ出廷シアラサル本又単ニ一  
部分ノ弁償ニ係ル抗弁ノ採用又ハ却下ニ付  
テ不服アル時ノ如キモノヲ控訴又ハ上告ノ

理由ト為シ得ヘキナリ  
盖對手人又ハ本人訴訟ニ在テハ裁判所ヨリ  
本法第七十六条第八十四条ノ規則ニ依リ其  
委任ナキ代人ヲ許容シ又ハ口頭委任ノ場合  
ト虽モ適法ノ委任状ヲ提示スルトヨリヲ要求シ  
得ルナリ又本条第二項ハ固トヨリ右ノ趣義  
ヲ含蓄セサルニ非ラス只對手人ヲシテ後來  
ニ為シタル訴訟上ノ所為ヲ無効ナリト抗拒  
セラル、ノ惧ナカラシメント保護シタルノ  
シ

第八十六条 (訴訟附添人ニ関スルノ条)

原被告ハ代言人ヲ以テ代人ト為スヲ必要トセ  
サル時何人ニ限ラス訴訟能力ヲ有スル者ヲ附  
添人トシテ共ニ出廷スルヲ得  
附添人ノ為シタル辨明ハ本人直ニ之ヲ取消シ又  
ハ更正セサル限り本人ノ為シタル辨明ト看做  
ス可シ

(第一解理由ノ説明) 本条ノ趣義ハ訴訟人ヲ  
シテ其権利伸暢ノ為メ努トメテ自由ヲ得セ  
レノシカ為メ必要ナル所トス而テ代言人許  
訟ニ於テ附添人ヲ許ルサ、ル所ナルハ即チ  
本法第七十四條第一項ノ主義ニ依テ明瞭ナ  
ルヘシ(然レ氏下ノ第三解ヲ看ヨ)之ニ及シ本

人訴訟ニ於テハ原被告ハ何人ニ限ラス訴訟  
能力アル者(本法第七十五條參看)ヲ附添人ト  
為シテ裁判所ニ共ニ出廷シ得ルノ権アリ乃  
チ、ハノール國訴訟法第百四條バデン國全  
上第百二十八條ウエルテムベルグ國全上第百  
二十九條バイルン國全上第七十八條亨漏生  
國全草案第八十九條北部独乙聯邦草案第百  
四十七條ハ皆本条ノ趣義ニ同一ナリ而テ附  
添人タルヲ得ルノ能力ハ受任代理ヲ為シ得  
ルノ資格ト一齊ナラシム  
附添人ヲ伴フヲ許ルニ付テハ本法第百四  
十三條ノ通則ニ依ル可ク又附添人ノ為シタ

ル辨明ハ本人之ニ異議ナキ限リハ本人ノ為  
シタルト同一ノ効力アルニ関シテハ本法第  
八十一条ノ規則ト一樣ナル可シ

(第二解制定ノ沿革) 北部独乙聯邦草案第百

四十七条ハ其偽称代官人ヲ禁止スル趣義ノ

規則ヲ附添人ニマテ及ホシアリト虽モ本法

ニ於テハ故ラニ之ヲ採用セス(本法第七十四

条及ヒ第七十五条ニ対スル第八解参看)他ノ

各草案ハ本条ト同文ナリ而テ國議院委員会

ニ於テ異議ナク採用セラレタリ

(第三解附添人ヲ許ルス可キ場合) 當ニ本条

ノ本人訴訟ニ於テ之ヲ允許スルノミナラス

復タ本法第七十四条及ヒ第七十五条ニ対ス

ル第五解ニ挙述セル例外ノ場合ニ於テハ本

人ハ附添人ヲ同伴シテ出廷スルヲ得ルナリ

抑本条ハ其附添人ヲ同伴シテ出廷スルニ

付テノミ云フノ義ナリ必竟昏面ノ起按淨寫

ノ如キハ随意ノ人ヲシテ為サシメテ固トヨ

リ妨ケナク單ニ自ラ是ニ氏名ヲ手昏スレハ

即テ可ナルモノナレハナリ(本法第百二十一

条(六)参看)

附添人ハ本人ノ委任ヲ受ケアルヲ必要トセ

ス何ントナレハ附添人ナル者ハ本人自ラ同

伴シテ親ク指名スルモノナルカ故ナリ

（第四解附添入ノ法律上ノ位地）理由説明ニ  
依レハ本法ノ第八十一条ニ同趣義ナルナリ  
而テ本条ハ全ク第八十一条ノ規則ニ倣フタ  
ルヲ以テ第八十一条ヲ爰ニ援奉シタルナリ  
仮令代人ヲ出スヘキ場合ニ在テモ必ス本人  
ノ出廷スル時ニ非ラサレハ附添人ヲ伴ヒ得  
サルヘシ然レモ例ヘハ本人ノ宣誓スル時ノ  
如キハ之ヲ要セス（本法第四百四十条參看）

司法省

司法省



